

63 『正骨範』から見た江戸時代の

整骨方法

陶 恵 寧

『正骨範』は浜田の藩医二宮彦可により一八〇七年に完成された接骨医学書である。二宮が医学修業中、長崎で蘭方医の吉雄耕牛について吉雄流外科を学んだことと、整骨医の吉原元棟のもとで、杏蔭齋流整骨術を学んだことが本書の完成に大きな影響を与えた。

本書は江戸時代の三大接骨医学書の一つに数えられているが、その特色は次の三点にまとめられる。

一、整骨手技…

杏蔭齋の整骨手技をよく研鑽し、それを基礎として十五母法（基本手技）と三十六子法（母法を応用して変化させた手技）を増やし、整理された手技は全身のほとんどの関節、骨格損傷の治療手技を含んでいる。その手技は動物の形態を連想できるように名付けられ、図解と説明を付

している。

二、整骨工具…

振挺法…振挺は整骨用の打撃工具で、長さ一・五尺、円周三・五寸の桐木の棒である。使用時、布で損傷した患部を包んでから、この棒でたたく。この方法は気血の流通、瘀血腫脹の消散を助ける働きを持つ。

腰柱法…腰柱は整骨用の器具の一つである。細長い扁平状の杉の木を四本用い、それぞれ幅一寸、厚さ五分であるが、長さは損傷した患部によって決める。その側面に穴をあけ、細長いひもでつなぎ合わせて腰部の背骨の両側に結び付けることができる。この方法は腰部損傷の固定に用いる。

杉籬法…杉籬も整骨用の器具の一つである。損傷した四肢の形、患部の長さや広さによって、杉の木片で竹籬状に編み、患部を布で巻いてから、この杉籬で固定する。この方法は四肢の損傷、特に骨折した場合に用いる。

裏簾法…裏簾は整骨する時に損傷した患部を巻くために用いた白い布を指す。その長さや幅は患部によって決まる。書中、和蘭式包帯法を引用して図を付して説明し

ている。

三、外治療法

敷薬法・乾燥した薬物を磨りつぶして粉末にし、蜜或いは糯米糊、水、生姜汁、酒、味噌汁、童便等を加えて練り、はけて損傷した患部に塗布する（布を巻く）。乾いたら、また塗布する。二、三日経って取り替える。この方法は薬物にかなり長い間その効果を發揮させることができる。

葉熨法・薬物を酒の中に浸し、熱く炒め、木棉布で包んで損傷した患部に当てて揉んだり、撫でたりする。

熨斗烙法・葱と定痛散を泥のように搗きつぶして、損傷した患部に敷き、酢の付いている紙を薬の上に貼る。焼いた鉄の熨斗で紙の上に烙する。

鍔熨法・葉を厚い紙に五分の厚さで敷いて、更に紙をかけて、損傷した患部に敷いてから、焼いた鉄鍔をその紙の上にかける。

以上の熨法は患部が冷えて痛む時によく用いる。

『正骨範』は和蘭折衷の作品として、主に中国の解剖、漢方、固定、外治療法等と、蘭学の包帯療法及び改良し

た杏蔭齋流整骨術を整理して紹介したものである。書中、独創的な熨斗烙法、鍔熨法等は他の日中整骨医書に記載されていない。論述した杏蔭齋流整骨術も二宮が自分の経験を加えたものである。江戸時代の整骨療法はここに大体が見られる。

（順天堂大学医学部医史学研究室）